



るんだよ!」。どんなに説得しても、痛いもんは痛い。でも、痛い・嫌な事に注目させるのではなく、嫌な事の次にある喜ばしい事を紹介するのです。

終末論とは、患難時代を語るのが終末論ではないんです。嫌な事の後、地上再臨したキリストが千年王国という究極の理想郷をこの地上にお造りになる。だけではなく、やがて新天新地という、想像を絶する神様の理想が完全に実現された世界が成るという事。

私はそれが大きなきっかけになって、信仰生活 40 年間、ほぼずっと終末論を考えています。

最近、とみに思うようになった事は、クリスチャンが終末論を学ぶというのは、結局は神様の計画の全体像を知る事ではないか。救われたという事が、単に「地獄行きを免れて、天国行きの切符を頂きました!」なら、薄っぺらいと思いませんか? 私たちは救われたけど、行き当たりばったりで救われたんじゃない。神様の壮大な計画に基づいて救われました。壮大な計画について書いてある聖書の学びをする事が、終末論の学びなんです。これが本当に分かったら、大局観を持つクリスチャンになれると思う。

世の中の色々な事に振り回されるのじゃなく、今大きな流れの中で、私はどこに向かっているのかという、歴史の中での自分が座るべき座席が分かり、鳥瞰図（ちょうかんず）的に人生を見る事ができたら素晴らしいと思います。

最初に、皆様ご存知だと思いますが、復習で、聖書が語っている終末論のタイムテーブル・ほぼ全てのプロテスタントのクリスチャンが理解している事を紹介します。

ある時、7 年間の患難時代に入ります。患難時代のスタートはハッキリしていて、反キリストと呼ばれる独裁者がイスラエルと平和条約を結ぶ、その瞬間です。後で時間があればそこを見ます。

7 年間の最後に何があるかという事もハッキリしています。キリストの地上再臨です。最終的にイエス様はオリーブ山に立たれて、エルサレムに攻め込んで来た、反キリストが集めた全世界の軍勢を息で殺します。「フッ」の一息で全滅。

それから 75 日間の猶予期間があるのですが、恐らくこの 75 日間に諸国民の裁きがあります。これも後で時間があればやります。時間がなかったらごめんなさいね。

その後、千年王国が始まります。千年王国の時、サタンは穴の中に入れてられています。底知れぬ穴。サタンが一切活動できない千年間なので、非常に良いのです。罪が入る前のエデンの園・創世記 3 章までの世界、素晴らしいでしょ。

でも、1 個問題がある。罪が入る前のエデンの園は、サタンが自由に活動出来たんです。だから蛇の形を使ってエバを誘惑した。誘惑者がいなかったら、こんな事になってなかったでしょうね。

千年王国はエデンの園のような状態で、且つサタンが活動の自由を奪われている。すごくいいですよ。

しかし千年の終わりに、サタンが一時的に出獄します。その時、千年王国でキリストを本当には信じていない人たち、入った時は全員クリスチャンですが、その子孫の中に反旗を翻す者たちがいて、最終的な裁きがあり、そこから永遠が始まります。それを新天新地と言います。

この流れについては、殆ど全てのプロテスタントのクリスチャンは同意しています。

しかし、今紹介しなかった、私たちにとって一番関係する大事件があるんですね。それは「携拳」。イエス様が空中まで来られて、初代教会から今日に至るまでの、全てのクリスチャンを復活させ、そして

一気に天に引っ張り上げて下さる。その瞬間に、この世界から教会が忽然と姿を消します。だから、高槻集会の求道者の方は、ある日曜日に教会に来た時、誰もいないのを見て「あ、来たな」と分かるでしょう。でもそれは、本当にすごい恐怖ですよ。

携挙が起こるタイミングについては、必ずしも一致してません。あるクリスチャンは、携挙は地上再臨のキリストの時に起こる。すなわち、携挙と地上再臨は同時に起こると考えている人たちがいます。これを「患難後再臨説（かんなんご さいりんせつ）」と言います。この考え方には、1つ大きな問題があります。それは、クリスチャンは患難時代に地上に残っているという考えです。なぜそう考えるのかは後で話します。しかしこれは、非常に弱い根拠しかありません。

患難時代は前半と後半に分ける事が出来ます。特に後半はひどい時代。それで後半を「大患難時代」という事もあります。

ちょうど3年半経った時に何が起こるかという、反キリストが、突如イスラエルとの契約を破る。有効期限7年なのに、3年半でその和平条約を破り、「俺が神だ」と名乗って、全世界の人々に自分への礼拝を強制します。これが起こるのは、ちょうど3年半の時。

2番目の案は、その時にキリストが携挙して下さる。そう信じる人たちもいます。これを「患難中期再臨説（かんなんちゅうき さいりんせつ）」と言います。

しかしもう一つ、私が拠って立つ立場でもあるし、聖書を字義的に読むならばこれ以外にないという事、すなわち患難時代の前にキリストは空中再臨し、クリスチャンを携挙して下さるという事です。

この3つがありますが、聖書を比喻として読むのではなく、文字通りに字義的に読むならば、教会が患難時代に残るというのはあり得ません。

今日は2コマ頂いているので、1コマ目は「患難時代の前に教会が携挙される」と思われる7つの理由、時間があれば8つ、もう少しあれば9つ、多分ないと思うけど、それを一緒に考えたいと思います。

「携挙」という言葉は聖書の中に出て来ません。聖書に出て来ないからといって、その概念がないという事は言えないんです。例えば、聖書に「三位一体」という言葉はありません。だからと言って、神様が三位一体ではないとは言えないのです。

今日は聖書をたくさん引きます。というのは、「ハハア」と聞いている時には、何となくそうかなと思うのですが、御言葉の裏付けがないと、後になって「どうかな?」となってしまうんですね。ちょっと面倒くさいと思うかもしれませんが、御言葉の裏付けを持った分かち合いをしたいと思います。

携挙とは一体何か? **I テサロニケ 4:14-17** イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずですよ。すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。

彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、の「引き上げられ」はギリシア語で「ハルパゾー」。ギリシア語の「ハルパゾー」が、ラテン語だと「ラプター」、英語になると「ラプチャー/Rapture」

これが携挙。引っ張り上げられるという意味です。

引き上げる（ハルパゾー）という言葉が、聖書の他の所で何と訳されているか？

**ヨハネ 6:15** イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再びただ一人で山に退かれた。

この時人々は、イエス様がたくさんのパンをただで配給してくれたので「この人を王様にしたら、いつまでも食いつぶされる事ないわ。是が非でも、無理やりにも、王様になってもらおう」と思って、連れて行こうとした。この「連れて行く」という言葉がハルパゾー。

つまりハルパゾーは、同意があろうがなかろうが、強力な力で強引なまでに、ものすごいパワーで連れて行く事を表す動詞なんです。イエス様は、あるタイミングで、教会のクリスチャンの準備が出来ていようがないまいが、「この時！」と来られた時に皆連れて行かれます。引っ張り上げられる。これが携挙。

携挙がなぜ患難時代の前にあるのか、7つの理由があります。

①患難時代に教会はいない。患難時代は神の怒りだから。

**I テサロニケ 1:10** 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。

この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してください。イエスです。

キリストはなぜ天から来られるのか・再臨されるのかというと、やがて来る御怒りから私たちを救い出すため。やがて来る御怒りとは、未来に到来する神の御怒り。それから救うためだと言っている。未来に神の御怒りの期間がやって来る、その期間からクリスチャンを救い出すために、神はイエス様を送って下さるのですね。

**I テサロニケ 5:9** 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。

神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく。私たちは神の御怒りを受けません。却って、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださった。ここの救いは、体の贖いの事。栄化の事です。

「私たちは、やがて来る御怒りにあわないで、栄化されるために定められたんだ。」

ですから、ここでまず押さえて頂きたい事は、クリスチャンは神の御怒りにあわないという事。

ところで皆さんは三段論法、お分かりですね。「AはBです。BはCです。従って、AはCです」。オッケーですか？「犬はワンと鳴く。うちのポチはワンと鳴く。従って、うちのポチは犬である」。大丈夫ですね？これを三段論法と言います。この三段論法で、教会は患難時代にあわない事を説明したいと思います。

教会が患難時代にいない 1 番目の理由；教会は神の御怒りにあわない。今①で聖書から確認しましたね。

**I テサロニケ 1 章と 5 章**で。

教会が患難時代にいない 2 番目の理由；神の御怒りとは何を指すのか？御怒りについて詳しく書いてあるのが**黙示録**。**黙示録の 6-18 章**は、患難時代について書いてあります。

患難時代は3つのパートに分ける事が出来ます。

①7つの封印時代 ②7つのラッパ時代 ③7つの鉢の時代。時系列に並んでいる。7年間は3つのパートが段階的に、封印からラッパ、ラッパから鉢と進むにつれて、一層ひどくなって行きます。今、公立学校は殆どが1年間3学期制。1学期・2学期・3学期。1年を3つのパートに分けています。このように、神様は、患難時代を3つの裁きの段階に分けて説明されているのです。

封印・ラッパ・鉢の時代は、**黙示録**によると、別の言葉に言い換えて紹介されている箇所があります。

#### ①【7つの封印】

**黙示録 6:12** また私は見た。子羊が第六の封印を解いたとき、

第六・第七と後ろに行くほどクライマックスです。子羊が第六の封印を解いたとき、恐るべき裁きが繰り広げられます。

**黙示録 6:16-17** そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」

封印時代は神と子羊の御怒りの日です。封印時代を別の言葉で言うと、神と子羊の御怒りの、大いなる日。これは、本当に恐ろしいですよ。

なぜ恐ろしいか？ もし私たちが罪を犯しても、私たちには子羊という弁護士/大祭司が立っておられて、執り成して下さい。しかし、弁護士である子羊が怒られたら、その怒りを宥(なだ)めるために、もはや誰も立ちません。後がない。それで、神と子羊の御怒りの、大いなる日は余りにも恐ろしいので、山々に「私たちの上に崩れ落ちて、生き埋めにしてくれ!」と叫んでいるんです。

患難時代の前半の前半でも、これは子羊の怒りの日なので、その時代の人にとっては恐ろしい事です。

#### ②【7つのラッパ】

**黙示録 11:15** 第七の御使いがラッパ（これは7番目のラッパ）を吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った。ラッパ時代のクライマックス。

**黙示録 11:18** 諸国の民は怒りました。しかし、あなた（神）の御怒りが来ました。

ラッパ時代は神の御怒りが到来する時代。

ここまで、①【封印】は神と子羊の怒り。②【ラッパ】は神の御怒りの時代。

#### ③【7つの鉢】

**黙示録 15:1** また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。

**黙示録 15:7** また、四つの生き物の一つが、七人の御使いたちに七つの金の鉢を渡したが、それには世々限りなく生きておられる神の憤りが満ちていた。

7つの鉢の中身は何ですか？「神の憤りが満ちていた。」

**黙示録 16:1** また私は、大きな声が神殿から出て、七人の御使いに、「行って、七つの鉢から神の憤りを地に注げ」というのを聞いた。

神の憤り、第3版では「激しい怒り」です。第3版の方が時々いいのね。大分改良されているけど、時々「え?」というのがあります。自分で労せず文句ばかり言うてるんですけど。

「激しい怒り」を「憤り」に訳し替えています、「神の怒りが激しい怒りになった」というのはピーク

なんです。つまり【7つの鉢】とは神の激しい怒り。

①【封印】は神と子羊の怒り、②【ラッパ】は神の怒り、③【鉢】は神の激しい怒り。  
この3つのパートで出来上がっているのが患難時代。患難時代をひと言で言うと、神の怒りの期間。  
神の怒りとは患難時代の事。患難時代とは神の怒りの日の事。

さて、三段論法を思い出して下さい。

教会は神の怒りに会わない。神の怒りとは患難時代である。したがって、教会は患難時代にいない。  
今日はあと8つくらい言いたいけど、これだけでも十分です。ハッキリしている。

しかし、もうちょっと掘り下げて考えてみましょう。これには反論があって、聖書を見ると、イエス様ご自身が「教会は患難にあう」と約束されているところがあるんです。「論理的には、教会は患難時代にあわないという事になるかも知れないけど、イエス様が『あなたがたは患難にあいます』と言われたじゃないですか。」

**ヨハネ 16:33** 「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」（新改訳第3版）

「あなたがたは、世にあっては患難があります」と言われている。あなたがたとはイエス様の弟子たち。  
だから教会です。教会の土台である使徒たちだから。

「教会は患難にあうじゃないか!」と思いがちなのですが、聖書を見て行くと、「患難」という言葉には、いくつかの違う意味がある事が分かります。同じ患難でも、何に由来する患難であるかという事。

この立場に立たれる方は、真摯なクリスチャンが多いと思います。時々読むバジレア・シュリンク（1904-2001）というドイツのクリスチャン、本当に祈りの姉妹でたくさんの事を学びます。

彼女は「教会は患難時代を通る。」というのは、「今の教会の生ぬるさを見てごらんください。こんな生ぬるい状態で、キリストの花嫁としてキリストの前に立つなんてあり得ない! 患難時代を通して、聖められて、キリストの前に立つというのが合理的ではありませんか。だから教会は患難時代を通るんです。」  
こう書かれた本を読んだ事がありますが、これは、本当に真摯な気持ちから出ている考えだと思えます。

しかし、あなたがたは、世にあっては患難があります。「患難」とひと言で言っても、ここで言っている患難の出所はサタンなんです。サタンがキリストを憎むあまり、キリストの花嫁をつまずかせよう・破壊しようと、憎悪を込めて攻撃する患難です。それはサタンの怒り。神の怒りではない。

聖書は、「教会がサタンの怒りから逃れるために再臨する」とは書いていませんでしたね。

「神の御怒りから救われるために、キリストは天から来る」と書いてあったんです。

患難時代に下る患難は、神が裁きのために下す患難であって、悪魔による患難じゃない。「同じ『患難』という単語が使われているから全く同一だ」と早合点すると、聖書が読めなくなってしまう。

なので、キリストがキリストの花嫁に対して、神の怒りをぶちまけるのはあり得ないと考えて下さい。  
もしあったら、ドメスティック・バイオレンスと思いませんか? ご主人が奥さんに向かって怒りをぶちまけて、それは問題ある罪人はする事だけど、イエス様はそんな事しない。だから、この患難は別です。  
患難時代に教会がいない3番目の理由; 患難時代を描いている聖書の箇所、教会を描いているのは1箇所

所もないから。もし教会が患難時代に留まっているなら、患難時代の出来事を描写している中に、教会という言葉が登場しなければなりません。1箇所も出て来ない。

黙示録 1-3 章は患難時代の前の事。そこには、教会が頻繁に出て来ます。

黙示録 19-22 章は患難時代が終わった後の出来事。そこにも教会が登場します。

ところが、患難時代を描写している 6-18 章には教会は1回も出て来ません。

教会時代を書いている 1-3 章の中に、患難が出て来るところがあるので見ましょう。

黙示録 2:18 また、ティアティアラにある教会の御使いに書き送れ。

黙示録 2:20-22 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしな。見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。

ティアティアラ教会の中に、異教を持ち込む女がおったようです。イゼベル。異端的教えが教会の中で横行しているのに、それを正すクリスチャンがいなかったので、聖書の福音と似ても似つかぬ偶像的・オカルト的・いかがわしいものが、教会にどんどん入って来た。しかし、神様は憐み深いので、悔い改めるように猶予を与えたけど、どうしても悔い改めなかったので、イゼベルを病の床に投げ込んだ。

彼女が打たれた後も、彼女が教えた異端から離れなかった人たちは、最初から救われていなかった人たちです。この人たちは、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。

意味は、主の携拳で天に引っ張り上げられるのは、全ての教会のクリスチャン全員ではない。本当に救われているクリスチャンだけという事です。洗礼は受けているけど、実は新しく生まれていないクリスチャンというのは十分あり得る事です。牧師の中で復活を信じていない牧師、今どき珍しくありません。

日本は福音が伝わって 100 年以上経っているのに、なぜクリスチャン人口が増えないのか? 1つは、たくさんある教会の中で、本物の福音の真理を保っている所が案外少ないのです。教会のメンバーとして毎週参加し・礼拝し・献金し・色んな活動をやっているかも分かりませんが、携拳の時に残される自称クリスチャンがいるという事。それを考えると、本当に新しく生まれるという事・自分の救いを確信する事・本物の福音を伝えて行く事が、どれほど大切かが分かります。

もう1箇所。フィラデルフィア教会の御使いへの言葉。

黙示録 3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

全世界に来ようとしている試練とは患難時代。全世界に来ようとしている試練の時(患難時代)には、わたしもあなたを守る。この訳では「患難時代には(あなたは)いるけど守る。患難時代を通過しながら守られる」という意味にも取れますよね。

ところで、「試練の時には」の「には」と訳されている言葉は、「エク」というギリシア語の前置詞です。エクは「〇〇から」という意味があって、つまり「全世界に来ようとしている試練の時からあなたを救う」と訳す事が出来るんです。

これに対しては反論があります。確かに「から」だけど、イエス様はヨハネ 17 章で「わたしはあなたが

たを悪い者から守ってくれるように、父に願いました。」

『悪い者から守る』と言う時、悪魔との接触が一切ないという事ではなく、悪魔の霊的な攻撃から守るという事で、悪魔がない別の時空に連れて行くのではない。よって、『から』と訳す事ができると言って、この1節をもって、患難時代にいないと言い切る事はできないのではないか」という考えもあります。もありますが、「から」と訳しても構わないんです。

1節で決着がつかない時は、総合的に判断してみる事が大事ですね。患難時代には教会が出て来ません。教会時代の事が語られている中に、「患難時代にあなたがたはいない」と示唆する御言葉が出て来ます。

患難時代に教会がない4番目の理由；患難時代には教会はないという根拠で、非常に分かり易い箇所が**黙示録4-5章**です。患難時代のスタートは**6章**。

**黙示録4-5章**は、天での礼拝・「患難時代の前、天ではどんな事が行われているのか」について書いてあって、それを見ると、神様の御座の所で、2つのものが礼拝しています。1つは4つの生き物と言われているもの。もう1つは24人の長老たち。

4つの生き物とは何か？ **黙示録4:7-8** **第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、**

旧約聖書に6つの翼を持つ御使いがいますね。セラフィム。**イザヤ書6章**に登場します。しかしここでは、セラフィムの顔についての情報は紹介されていませんでした。新約聖書で初めて明らかにされた情報なんです。旧約で前もって知らされている情報が、新約の時代になって、より詳しく・より深く明らかにされるという事がよくあります。ここがその代表。

セラフィムは神を礼拝していますが、同時に24人の長老たちが礼拝している。

**黙示録5:8** **巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老たちは子羊の前にひれ伏した。彼らはそれぞれ、豎琴と、香に満ちた金の鉢を持っていた。香は聖徒たちの祈りであった。**

そして9節から、24人の長老たちの賛美が出て来るのですが、この賛美をよーくお読み下さい。

**黙示録5:9-10** **彼らは新しい歌を歌った。「あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民（くにたみ）の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」**

ここに、新改訳2017・第3版とも、大きな問題があるのです。新改訳聖書の**黙示録**を担当した方は、「患難後再臨説」のギリシア語学者です。私たちは翻訳された物を読むので、どんな神学が入り込んでいるのかを、完成した翻訳文から見抜くのは難しい。難しいけど、ここは非常に大きな問題の箇所なんです。

「すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い」と書いていますが、原文は「**私たち**」なんです。「全ての部族、言語、民族、国民の中から、イエス様の血によって、神のために贖われた**私たち**」。これは教会の事です。つまり、教会を表すのが24人の長老たち。

24人の長老たちが教会を表す根拠は何か？ ちょっと込み入った話になりますが、聖書の原本は、もう存

在していません。原本を写したものが写されていくのです。その中で比較的、新約聖書のほぼ全部が揃っている写本が3つあって、これを三大写本と言います。他にも写本は2500くらいあるんですよ。でもそれらは、マルコの福音書が丸ごと欠けてるとか、新約聖書全体の1/3しか残ってないとか。マタイ伝から黙示録まで、全部揃っている写本となると三大写本。だから、三大写本は権威があるという前提で、翻訳されてしまうわけです。

三大写本の中の1つ、ロンドンにあるアレクサンドリア写本だけが、ここを「人々」と書いている。三大写本の残り2つと2500の写本の中で、黙示録のこの箇所が書いてある写本は全部「私たち」。現存している写本の中で、「人々」と書いてある写本は1つしかないんですよ！その1つの写本を採用して、翻訳してありますねん。「そんなん、もう買い替えるのイヤになる。」でも2017版全体としては、いいと思います。上げたり下げたり、忙しい。

だからこれは「私たち」。「全世界の全ての民族の中から、イエス様の血によって贖われたのは私たちだ！」「全世界の民族の中から、イエス様の血によって贖われた集団は教会しかない。その教会は私たちだ！」と24人の長老が言っているのなら、24人の長老は教会の事です。

24人の長老たちが天で礼拝している段階では、患難時代はまだ始まっていません。患難時代は6章から。患難時代が始まる前に天に引き上げられた教会たちの礼拝の様子が書いてあるのが4-5章です。だから、この箇所から、患難時代に教会はいないと言えるのです。

患難時代に教会がない5番目の理由；神のご性質上あり得ない。創世記18章を開けて下さい。ここは、受肉前のメシアが2人の御使いを従えて、「これからソドムとゴモラを滅ぼそうとしているのだ」と打ち明けるんですね。その時ソドムには、アブラハムの甥っ子ロト一家が住んでいました。そこで、何とかその裁きを考え直して頂こうと思って、アブラハムは一生懸命神様にお祈りをします。

その執り成しの祈りの記録が、創世記18:23-25 アブラハムは近づいて言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者とともに滅ぼし尽くされるのですか。もしかすると、その町の中に正しい者が五十人いるかもしれません。あなたは本当に彼らを滅ぼし尽くされるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにならないのですか。正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか。」

神様は全知全能ですよ。何でもご存知で、何でも出来る。しかし、神様でも出来ない事があるんです。神はご自分の本性に反する事は出来ません。神は聖い方だから、罪を犯す事は出来ない。神は公正な方だから、えこひいき出来ない。神は正しい方だから、罪を愛する事は出来ない。神は誠実な方だから、約束を破る事は出来ない。

神様だからこそ、出来ない事があるんです。ご自分の性質に反対する事は何一つ出来ない。

正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。

「ソドムにはロトという義人がいます。彼は義人なので滅ぼされても天国に行くから、死ぬ時は一緒に死んでもいいんだと、そんな事をあなたがなさるはずがありません！正義と公正を愛する方が、悪い者も正しい者も一緒の取り扱いをする、というような事は絶対にあり得ません！なぜなら、あなたのご性質だからです。」

この神様のご性質にのっつて、義とされ贖われた教会が、患難時代に地上に残されて、一緒にその患難を被るといふ事はありません。神のご性質上、あり得ない事なんです。

結局ソドムは滅ぼされてしまいます。**ルカ 17:28-29** また、ロトの日に起こったことと同じようになります。人々は食べたり飲んだり、売ったり買ったり、植えたり建てたりしていましたが、ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降って来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

ロトがソドムから出て行ったその日に、神からの裁きが下ったのです。

神の怒りは、教会がこの世から出て行った後で起こる事。それを語っています。

さて、「患難中期再臨説」の根拠となっている部分をお話します。が、「患難中期ではない。患難時代に入る前にキリストが来られる」事を申し上げたいのです。

先程**テサロニケ 4 章**で、神のラッパの響きの内に、私たちは天に引き上げられるというのがありました。**I テサロニケ 4:16-17** すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。

**I テサロニケ 4 章**はゆっくり学びたい。ゆっくりやりたい。だけど今日は終末論だから。ざっくり。ゆっくりじゃなくて、ざっくり。あと 10 分で今 5 つ。8 つなんか絶対無理。

**テサロニケ**で「神のラッパ」と言われたところが、別の言葉になっています。

**I コリント 15:51-52** 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

ラッパの響きの内にキリストが来られた時、2 種類のクリスチャンがいます。携挙当日、既に死者になっているクリスチャンと、携挙当日、生きたままキリストと出会うクリスチャン。

キリストが来られた時、既に死んでいたクリスチャンは、死者は朽ちないものによみがえり、栄光の体に変えられます。

生きているクリスチャンは**変えられるのです**。つまり、死をスキップして栄光の体になるんですよ。これね、一番いいと思う。僕はクリスチャンだから死は怖くない。だけど、痛いのは怖い。家族に言っているのは「もし私が病気とか癌とかなったら、医療用麻薬、ドバドバ入れて。」それで喋れなくなっても、もういい。生きてる時、こんだけ喋ってんのよ。もう、そんなヘトヘトの状態喋りたくないから、とにかくドバドバ入れて、楽に行かせてくれと。死を経験しないでバツと変えられたら素晴らしいと思います。

死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

ここに、パウロの信仰が出ているのが分かりますか？ パウロは自分を変えられる側のグループに入っているんです。つまり「自分が生きている時にキリストの携挙がある」と信じて語っているわけ。今すぐに起こってもおかしくない事として、携挙について学んでいるんです。

携挙が起こるのは、天的にはラッパが響くのですが、終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに

変えられます。と書いてある。

患難中期再臨説は「終わりのラッパを、患難時代の7つのラッパの7番目と捉えると、クリスチャンは患難時代にいるという事になりやしませんか?」という考え方です。

7つのラッパの1番目は「初めのラッパ」。2.3.4.5.6.7番目のラッパは「終わりのラッパ」。  
終わりのラッパがいつ鳴るかという、患難時代のちょうど中間期。「7番目のラッパこそが、7つの鉢のスタート合図だ。だから大患難の直前、患難期中期に携挙がある。パウロは7つあるラッパの、終わりのラッパの事を指して言ったんだ」と仰るのですが、これには1つ大きな欠点があります。

IコリントはAD53年頃、黙示録はAD96年頃に書かれました。つまり、Iコリントが書かれた段階で、パウロは7つのラッパの事を知らないんです。そんな聖書は、まだ存在していなかったから。だから、7番目のラッパの事だという論理は通用しません。

そもそも、ラッパが吹き鳴らされた後に起こる出来事の内容が違い過ぎます。このラッパが吹き鳴らされると、死者は朽ちないものによみがえり、生きているクリスチャンは栄光の体に変えられるという究極の素晴らしい事・喜ばしい事が起こるでしょ。

7つのラッパの7番目のラッパが引き起こす事は、大患難時代ですよ。内容が違い過ぎる！  
なので、同じものと考えするには非常に無理があるので、この考えに立つ人は比較的少数派です。

患難時代に教会がない7番目の理由；引き止める力について考えてみましょう。Iテサロニケは携挙について、IIテサロニケは地上再臨について書いてあります。

IIテサロニケ2章に反キリストの情報が出て来ます。

IIテサロニケ2:3 **どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者(反キリスト)、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。**

IIテサロニケ2:5 **私がまだあなたがたのところにいたとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。6不法の者がその定められたときに現れるようにと、今はその者を引き止めているものがあることを、あなたがたは知っています。7不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。**

反キリストが出て来ないように引き止めているものがある。引き止めているものとは何か？

よく読むと、6節の引き止めているものの「もの」はひらがな。7節の引き止めている者は「者」。忍者・医者「者」・人格ある者。つまり、引き止めているもの/者とは、引き止めている何かであり、且つ誰か。ものでもあり、人格でもある。

ものとしても紹介され、人格としても紹介されているものとして、聖書的に最も妥当なのは、神の教会の中に臨在している聖霊です。クリスチャンはイエスを信じた時、ご聖霊が内住していますよね。聖霊が内住しているクリスチャンによって構成されている神の教会が天に引き上げられた時、引き止めるものがなくなると考えられるんです。

その根拠を3つ言います。ご聖霊は、ものとしても、人格ある者としても、紹介されているからです。

ヨハネ14:26 **しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。**

「教会・教会を形作っている人には聖霊が内住します」という約束です。聖霊という言葉は中性名詞。ギリシア語には男性名詞・女性名詞・中性名詞と名詞に性別があって、中性名詞は人格ではないものを指す時に使う事が多いんです。

ところが、ヨハネ 15:26 わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち、父から出る真理の御霊(聖霊/中性名詞)が来るとき、その方(聖霊/男性名詞:人格ある者としての性別を持った名詞)がわたしについて証ししてください。

すなわち、聖霊はものとしても、人格ある者としても、両方の言葉遣いで紹介されている。その聖霊を宿している教会が取り去られる時、抑えるものがないという事です。

聖霊には悪を抑える力があるんですね。創世記 6:3 そこで、主は言われた。「わたしの霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、人の齡(よわい)は百二十年にしよう。」

創世記 6 章は、人類が猛烈な墮落を始めたという記事です。ここで、「神様は人間の寿命を 120 歳にした」と聞いた事がありますか? その解釈は間違いです。

主は言われた。「わたしの霊(聖霊)は、人のうちに永久にとどまることはない。だから、人の齡は百二十年にしよう。」この直接的な意味は、「聖霊は人の世界の中で永久に留まる事はない。ここで留まって悪を抑えるのは 120 年までだ。」つまり、120 年を過ぎると一旦去ります。そして洪水があるんです。直接的な意味は、洪水が起こるまでの猶予期間は 120 年。神様は忍耐深く、120 年間も洪水という裁きを猶予されたという事。

その聖霊の働きがなくなるとグワッと悪くなる。誤解のないように言いますが、聖霊は三位一体の神で遍在されているので、世のどこにもいなくなるという事ではありません。しかし聖霊は、聖霊を宿す器を使って、神の働きをさせるんです。

あるところで、イエス様は弟子たちに「あなたがたは地の塩です」と言われました。塩は防腐剤の役割をします。肉はほったらかしだと腐るけど、塩漬けだと腐らない。腐り止めの教会が天に引き上げられたら、一気に腐りが始まるんです。クリスチャンに宿っている聖霊が、教会の携拳と共に引き上げられる事によって、引き止める力/ブレーキがなくなり、そして反キリストが出て来る。教会はブレーキなので、反キリストは出て来れない。だから、反キリストが自由自在に活動する 7 年間に教会はいない。いたら、出て来れないから。

時間が…。あと 1 個だけにしましょう。

ピリピ 4:5 あなたがたの寛容な心が、すべての人に知られるようにしなさい。主は近いのです。

初代教会のクリスチャンの感覚はこれ。「主は近い。」初代教会の人たちの挨拶言葉は「マラナ・タ」。これは I コリントの最後に出て来ますが、「主よ、来て下さい」という意味。

もし患難後に携拳があるというなら、少なくともすぐじゃない。7 年以上未来になります。

「主は近い!」と言っても、まだ患難時代に入っていないという事は、少なくとも 7 年以上未来にならないと来ない事がハッキリしているわけだから近くない。

7 年で、今 43 歳の方は 50 歳、今 63 歳の方は 70 歳ですよ。今 83 歳の方は 90 歳だ。早いんですか? 今 13 歳の方は二十歳(はたち)になるのに 7 年待たないといけない。近い言うても、それは白々しい。

主は近いという意味は、いつ起きても・今起きても不思議じゃないという事。

